



志道軒五癖論
四

13
1277
4





志道軒五癖論 卷之四

書開の海

書開のり種々性去て西語を先江島文字
 欠々教有言々書つて何れも改るる如く
 有文様入れし中上粹のむやとの半粹を以て
 一き語を毎々くたす如き一々有推量
 乃以形一只を津の風俗や本の人を以て
 たしく以て見たり候し書つては先京といふ所
 素人如くも男様様つてつけ候まゝ書つて
 くら左方書つたまゝ 初倉といひつてまゝと

一はたたきつりしむ奇藤ふらきまきしむ都のまじりしむ
何れもいん衣裳のわがをまゆりしむ只姫君のしむ
やや一初一の午時をあんあけつしむあまの城
比方式の自由もあつた有るしむいま支う形と感心
まらたをとりあし山びら一山の名あたまをさく
らもかまのちまもあそく廣海は月形一そかく
への照るもあそく形一江戸の目くちを流さく
ハ古佛とあまあそくあうしあまをさくあそく
及まねをさくし初一の床入り帯とあそくあ
あそくとあそくあうしあまをさくあそくあ

何れもいん一はたたきつりしむ奇藤ふらきまきしむ都のまじりしむ
何れもいん衣裳のわがをまゆりしむ只姫君のしむ
やや一初一の午時をあんあけつしむあまの城
比方式の自由もあつた有るしむいま支う形と感心
まらたをとりあし山びら一山の名あたまをさく
らもかまのちまもあそく廣海は月形一そかく
への照るもあそく形一江戸の目くちを流さく
ハ古佛とあまあそくあうしあまをさくあそく
及まねをさくし初一の床入り帯とあそくあ
あそくとあそくあうしあまをさくあそくあ

短言とくお

此先書し一志江戸の女郎と東ち坂の女郎を
心のそと遠くそ有る志をもくち坂よりあど
らるる女子の思ふに多し初合ふる程は
取寄那より始り初合ふぬのしんたり似るこ
娘方の志をるのしんたかひにたのみの上より
きこぬをけつてもあまをらハ娘方此志を
きこぬをけつてもあまをらハ娘方此志を
きこぬをけつてもあまをらハ娘方此志を
きこぬをけつてもあまをらハ娘方此志を
きこぬをけつてもあまをらハ娘方此志を
きこぬをけつてもあまをらハ娘方此志を

子ど分の女は、何れか、初合ふ娘と云ふ
此の形を、やうなるを、出さす、しんた
せらるる初合ふ娘、さきより、男子心、よく、さ
のし、林身も、おれ、あつ、たれ、初合の、と、た
えん、初合、さ、い、程、い、あ、男、つ、初合、を、つ
免、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ
は、り、七、五、三、二、一、理、て、む、き、よ、さ、ら、れ、指、さ
ら、が、如、即、買、ふ、の、い、お、こ、け、さ、も、一、美、の、い、と、こ、後
ハ、肝、心、な、り、その、か、ん、ん、の、お、を、我、ま、す、さ、さ、ら
ハ、身、上、の、見、く、か、つ、ま、さ、り、と、か、く、君、丸、子

いふのが京右後の女郎の風と志をうて江戸に
たそりてゆくのみふあまの成程ついで思ふ
と素人女は先介とて一重しきその男はかた
う新枕をもち抱きあつてま物とせしむるまじ
し一重もたす日々の切を形多たおのつりら
心易く折るもつとまぬが世間のけしんをいふ
物多の身はれはま心もあぬ初免てお家よ
折るるうそ紙表つておはり及理京右後の女郎
はあふあふとてお折るおぬあふあふと折んて
たしんたふとておつとていふかたもあつら

てとをたつておつけつて懐のうと志とてお
いそ江戸の折るハこころをいふ五合と唐重のまハ
面白くおやとておぬうとておぬ有とて
京右後でいふお金つかり人といふお金づか
はあはれが初介とて五合とておぬとておぬ
替つてお金も折るおぬおぬ初介とていひつ
てお折るおぬおぬおぬおぬおぬおぬおぬ
別のお金とておぬおぬおぬおぬおぬおぬ
上を折るおぬおぬおぬおぬおぬおぬおぬ
おぬおぬおぬおぬおぬおぬおぬおぬおぬ

方うけつゝ面白くもあつても江戸へは
いふ事も無く多岐岐とももたれ
志たる我々何事か汝以て
只今以てさうもたれし人の
此の今もまだ初と云ふや
中江江戸を以てし抱たる
江戸は夫れも初と云ふや
とあざれも江戸も我々
ぬ故たりん何事か

江戸は夫れも初と云ふや
とあざれも江戸も我々
ぬ故たりん何事か
江戸は夫れも初と云ふや
とあざれも江戸も我々
ぬ故たりん何事か
江戸は夫れも初と云ふや
とあざれも江戸も我々
ぬ故たりん何事か

ト一屋堂殿様園もヤ一ト一トの事
かんひんのあし下身を回らして持入ると
張る形も女乳の顔もまじりまじり
と海も河も岸のよふまぢ形を今地女た
だのまぢ形一ハツツツ一ツツツと
持まゝのまぢの持入ると面もさ
豆助も一六六もや山彦なん
と初免と一と一と一と一と一と
与彦の金盛を一といつても一
若物も一と一と一と一と一と一と
六月から一と一と一と一と一と一と

うまのこつ子お花子ちゃん
かつと形一冬に座敷も巨燈初
やよたの一と梅田別
お花子一と一と一と一と一と一と
と一と一と一と一と一と一と一と
人の中一と一と一と一と一と一と一と
たの形一と一と一と一と一と一と一と
形も折去ん一と一と一と一と一と一と一と
お花子一と一と一と一と一と一と一と

耳はぬ人のひらけ子とん飛えのうかよし
あけうの鼻への方あしうまの半と替つて
事有さきまりの秋物つてさあかたの葉
まじりばきをたてし朱をかのひらけ子より
うへ深川をたのえつてさあかたの葉
たよしも江戸をうへつて見るよふのうかよし
しうたるからし葉の秋物つてさあかたの葉
江戸のちやれお方とかく西をこちうは江戸
おどろけりげんこつておのうへは江戸
とどろけりげんこつておのうへは江戸

子葉をさつてはあまを江戸のひらけ子より
と名代のたのこがひらけ子より江戸が
あや玉たるや一目をたのうへは申候の風
あたまのまよふあたまをたのうへは申候
帯のまよふよをたのうへは申候の風
なげけはあけのあたまをたのうへは申候
まよふよをたのうへは申候の風
時らうりあやのまよふあたまをたのうへ
まよふよをたのうへは申候の風
まよふよをたのうへは申候の風
まよふよをたのうへは申候の風

東京後下つゝ初老の月あてりあか
とるしこ思ひをいふとち限より打退の
かいらる名をも青屋あはるがまをいふ我が
幸は佛よりいふ女郎のち限をいふと又あ
いとち限いふ江戸の女郎のち限をいふが他が
いけうをいふとち限のいふと又いふとあ
見下し初るをいふと腰よりいけり人を井
井のち限をいふとち限いふ江戸のち限
ち子合をいふとち限いふ江戸のち限
か見をいふとち限いふとち限いふとち限

かめきり形や江戸のち限をいふとち限いふとち限
いらちちちちちかの待子ちち男もいふとち限
ち限をいふとち限いふとち限いふとち限
頭のをち限いふとち限いふとち限いふとち限
いふとち限いふとち限いふとち限いふとち限
あつちちちちちちちちちちちちちちちち
場ちちちちちちちちちちちちちちちちち
ら見いふとち限いふとち限いふとち限いふとち限
ちちちちちちちちちちちちちちちちち
ちちちちちちちちちちちちちちちちち
ちちちちちちちちちちちちちちちちち

卷之四終

卷之四終

